人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 1, 9-27.

■　特別寄稿論文

南山短期大学
人間関係研究センター２０年の歩み

伊　藤　雅　子
（南山短期大学名誉教授）

Ⅰ　南山短期大学人間関係研究センターの設立
1．南山短期大学人間関係科設立との関わり
2．規程と人員構成、経済的側面
3．「旗揚げ興行」講座
Ⅱ　南山短期大学人間関係研究センターの歩み
1．公開講座とカタログの発行
2．研究会
3．人間関係紀要の刊行
4．「生涯学習の基盤整備」にむけて
Ⅲ　今後の課題

Ⅰ　南山短期大学人間関係研究センターの設立

1．南山短期大学人間関係科設立との関わり

１９７３年（昭和４８年）の南山短期大学人間関係科設立は立教大学キリスト教教育研究所（以下ＪＩＣＥという）の存在と深く関わっていた。設立にたずさわった人々が行動科学的・学際的高等教育機関のアイデアをＪＩＣＥの研修プログラムから得て、それを基に短期大学教育のカリキュラムや教育方法を作り上げ、人間関係科が創設された。そして人間関係科の教員はこの人間関係教育・トレーニングを体得するためにＪＩＣＥのベイシック研修を必ず受けたが、この研修は社会人向けのものであったので、その研修の方法論を短期大学の教育に応用するためには、それなりの配慮が必要であった。当時の南山短大

人間関係科の教員もいつか、自前でこういった教育に携わる後継者を育てていくために、科の高等教育機関としての充実と、学生教育と平行して、社会人向けの研修機関を組織する必要が生じてくることを予想し、また体験学習という教育方法をめぐっての理論や実践の研究をしていくことをしなければならないと考えていた。

また、南山短期大学が女子を対象とした教育機関であるため、学生は社会人入学制度が設けられるまでは、少数の例外を除いては大多数が高等学校を卒業した同質的な１８才前後の女性であった。特に１９７０年代からから８０年代にかけては、短大としてはたいへん幸いなことであったが、１０倍を越える入学志願者からの選抜が行われたため、学力的にも均質な学生が入学してきた。この同質性・均質性は当時の日本の高等教育の実状であったとはいえ、こと人間関係に関して言えば、一般社会における現実の人間関係とは様々な意味で異なるものであった。そのため、学生向けの教育ツールが一般社会人にも通用するものであるかどうか、教員の姿勢や実施方法がどのような対象に対しても適切であるかどうかが常に検討され吟味されなくてはならなかった。南山短期大学の人間関係科設立時から感じられていたこの、①「体験学習」の理論と実践の研究と、②様々な領域に生きる社会人向けの研修の妥当性の吟味という２つの必要性を満たすために１９７７年（昭和５２年）９月、南山短期大学人間関係研究センターは発足した。

この発足に先だって、人間関係科設立の礎石を置く役割をはたした吉川房枝教授は１９７５年８月、次のような「人間関係のアクション・トレーニング・リサーチ・センター（Human Relations Action-Training-Research Center）を南山学園に設置するすすめ」を南山学園の理事会宛に提出している。

（１）教育の人間化（Humanization）と社会の改善・変革

人間疎外が問題視されている現代社会において、人間尊厳の精神を回復する道は教育にあると思います。その場合も、教育が単に知識の伝達や技術の訓練であるだけでなく、生きている人間と人間関係そのものの成熟を目ざすものであることによってはじめて習得した知識や技術をも社会の人間化に役立てることができると思います。

（２）アクション・リサーチであること

このセンターでは、実践と研究を直結させる方法をとります。アクションの基礎は、慎重に収集され分析されたデータにおかれ、アクションの結果はたえずフィードバックされて、それらのデータは次のアクションがとられる前に評価されます。すなわち、可能な限り、いつでも、アクションの決定のために妥当なデータが用いられ、また、アクション自体が評価のためのデータを作り出します。

（３）歴史的展望

ドイツで生まれアメリカで活動した心理学者、Kurt Lewin（1890〜1947）は、１９４３年にマサチューセッツ工科大学に グループ・ダイナミックス研究センターをつくりました。研究のすすめ方と、とりあげられる問題はつねに、実践と理論が結びつけられ、日常の集団生活改善のための実践的知見を提供しました。第２次世界大戦後は、とくに人間関係についてのアクション・リサーチが注目されはじめたのです。これが、アメリカのＮＴＬ（National Training Laboratories）の体験学習の理論と結びつき、この理論にもとづく人間関係訓練は、現代の非人間化傾向に対する対策としてアメリカでもヨーロッパでも大きくとりあげられています。　日本でも １９６０年頃から、この種の人間関係訓練がＪＩＣＥを中心に、　教会人や一般社会人を対象に実施され、人間回復（Humanization）をめざしたアクション・リサーチが積みかさねられてきました。そして数年前からは、社会人教育から大学教育へと、この学習理論の導入が試みられ、南山短大の人間関係科の設立をみるに至ったのです。大学教育ばかりでなく、学校教育のどのレベルにおいても必要な教育の人間化のために、また社会の人間化への改革のために、この人間関係科の設置は大きな意味をもっていると考えます。　上のような、世界の歴史的視野に立ってみるとき、社会、および学校教育の動向はこの人間化（Humanization）にむかって行くはずだと思います。南山学園が、いま専門的にこの Humanization を実践・研究するセンターをもつことは時宜を得ているとおもいますし、日本の教育・社会の将来のために、大きな影響力をもつことになるでしょう。

（４）学際的・国際的であること

具体的に計画をすすめるためには、さらに多くの人々の知見を集めて構想をねるのがよいと思います。学際的・国際的であることはのぞましくもあり、必要でもあるでしょう。特に人間関係訓練においてアクション・リサーチに経験のあるＪＩＣＥのスタッフの意見は有力な参考になるでしょうし、この方たちは、大いに協力する意思をもっておられるのではないかと思います。

吉川構想の中には、人間化のための教育訓練、アクション・リサーチの必要性は強調されているが、人間関係科の教員が新たに生まれた「科」の教育理論と方法とを、学校で人生経験の限られている１８、９才の女子学生に対してだけ、この教育方法を実践するのではなく、出来るだけ機会を作って成熟した社会人と相対しながら、自分の教育の在り方、訓練の妥当性などを吟味していく必要性については触れられていない。１９７７年（昭和５２年)、多治見で行われた人間関係科の教員合宿で、教員間でこの必要性が確認され、吉川構想をふまえつつ、社会人むけの公開講座開催、研究会主催、教育実践研究の成果の刊行を主な事業とするセンターの設立に向けての動きが踏み出された。

２．規程と人員構成、経済的側面等

このころ、南山大学には、すでに人類学研究所・宗教文化研究所・社会倫理研究所などが設置されており、また日本研究センターやアメリカ研究センターも発足していた。人間関係研究センター設立に先だってセンターの規程をどのようなものにするかについて検討された結果、純粋に研究的活動をすると言うよりは教育実践活動に研究的に取り組む独自のセンターを目指すという意味からアメリカ研究センターの規程をモデルとして出来るだけ簡潔な案を作成し、理事会に認可を求めた。その案は１９７７年（昭和５２年）９月承認され、センターは発足することとなった。この時、承認された規程は、〈資料①〉として文末に掲載されている。

この規程は１９８８年（昭和６３年）に全体を掌理し代表する責任者の呼称を「主任」から「センター長」（Head of the Center → Director ）に変更されたほかは、２０００年（平成１２年）まで、そのまま施行されている。

これまでのセンターの責任者は次のようである。

1977年9月～1982年3月	リチャード・メリット	主任
1982年4月～1986年3月	中堀仁四郎	〃
1986年4月～1988年3月	山口真人	〃
1988年4月～1992年3月	星野欣生	センター長
1992年4月～1998年3月	伊藤雅子	〃
1998年4月～	グラバア俊子	〃

研究員の委嘱に関しては人間関係科の専任教員全員と講座を担当する非常勤講師を中心にし、南山短期大学のもう一つの科である英語科科長も委嘱した。研究員は２年の任期で、上記以外にセンターの活動に関心があり、体験学習を用いた人間関係教育に関心のある者に南山短期大学学長が委嘱した。

講座の種類は入門的なものと、アドバンスド・集中的なものとにわけ、各講座の募集定員と講座受講料を設定し、その収入全体で講師の謝礼と運営費（資料印刷費、通信費、会合費、アルバイト人件費、諸費等）をまかなうことの合意がえられた。この基本方針は設立以降２３年間にわたって受け継がれてきた。

事務局の運営については、人間関係科の事務職員が臨時アルバイト職員の協力を得て行った。しかし、人間関係科自体も、そしてセンターも合宿授業や宿泊研修が多く、そのための宿舎や往復の交通手段の交渉、合宿中の生活・研修の世話から出版等のさまざまな経費の支払いのなど、かなりの仕事が事務局に課せられることになった。そして、臨時職員の協力だけでは限界もあるので１９９０年から事務局を整備し、センター専任の嘱託職員を委嘱するようになり、その経費をセンターの予算から支出する事になった。今日まで、センター

の運営を支えてきた人間関係科職員の新林麗子さん、滝田洋子さん、渡辺みどりさん、黒田美樹さん、菅野均美さん、人間関係科臨時職員の鈴木有子さん、センターの嘱託職員芝原香里さん、吉田奈美江さん、大竹由夏さん、小木曽洋子さんは云うに及ばず、その他、多くの臨時アルバイトの方々には大変お世話になった。

センターの経済的側面も決して豊かであるとは言い切れないが、受講者からの受講料収入だけではまかないきれないカタログと研究紀要の印刷費には南山短期大学フラッテン研究奨励金から援助を受けた。即ち、１９８３年（昭和５８年）より年　２９０,０００円、１９９２年（平成４年）より１,０００,０００円の補助を受けている。

３.「旗揚げ興行」の第１回人間関係講座

人間関係研究センターの発足についての基本的な取り決めがほぼ固まった段階で、いよいよ最初の公開講座をスタートすることとなった。事前に簡単な調査を行った後、第１回の人間関係講座は「あなたの潜在能力をのばし、自己実現を試みる」というねらいのもとに、実施された。（実施要領は〈資料②〉を参照）

どのような行事の場合も不特定多数の関心のある人々にいかに周知させていくかは大きな課題であるが、スタート時点では 実施要領に申込書をつけたリーフレット、（Ｂ４版色上質紙３つ折）を作成し、県および市教育委員会社会教育担当機関、名古屋市内各小中学校ＰＴＡ、ＹＭＣＡ、ＹＷＣＡ、愛知県内カトリック教会と教会学校、聖公会関係施設、人間関係科フィールドワーク先施設、名古屋市内の新聞社等の報道機関と、人間関係科の全卒業生へ郵送した。また数人の教員が関係筋へ直接パンフレットを持参して協力方のお願いをした。

第１回人間関係講座には定員５０名のところ５１名の申込があり、４６名の方が最後まで受講され、好評の内に終了した。この講座は毎年２～３回開講され、既にその回数は５０回を越えた。基本的内容は大体そそのまま継承されながらも、担当者によって少しずつ全体の流れ、用いられる実習・小講義の調整がされた。そして、参加型教育方法の新鮮さなどにより、常に多くの熱心な受講者によって支えられてきた。また、講座がそこでの学びや体験を手がかりに自主学習グループ発足のきっかけとなった例も少なくない。この講座開講の時間帯については、最初は６時をスタートとしたが、受講者の多くが午後５時までの勤務時間があることから、次の年度より開始時間を１５分遅らせ午後６時１５分とし、終了時間を午後９時とした。

センター活動２年目に入った１９７８年には、年度始めに〈資料③〉のような内容の葉書１,０００枚を印刷し、関係者個人や団体に発送した。また、開講初年度から数年間は当時の南山短期大学美術担当の教授、大嶽智弘氏デザイ

ンのポスターを作成し、名古屋市内の社会教育センター、図書館等を中心に配布した。１９７８年度以降は基礎研修、アドバンスド・コースと各論的コースを開講を企画・実施し、また研究員を中心とした２回の研究会も開催し、研究センターの活動も軌道に乗ってきた。また、主婦の受講希望者が多いことから、１９８８年度より殆ど毎年、南山短期大学の正規授業の教室事情が許される範囲で、平日午前に講座を開講している。

ささやかなことかも知れないが、最初の講座が夕方、勤務を終えた人々を対象としていたため、メリット主任の提案もあって、講座の雰囲気をやわらげ、ゆとりをもって学習に集中できるよう、初回からすべての講座に「お茶の時間」をもうけ、受講者と講師が短い懇談をする事ができるよう配慮してきた。出されるのは基本的にセルフサービスの紅茶・コーヒー、クッキー程度であるが、受講者にとっては他では見られないセンターの特徴となった。また、講座終了時には講座の３分の２以上出席した受講者に南山短期大学学長、センター長、担当講師のサイン入りの終了証書をお渡ししたが、これも、受講者にははげみとなり、好評であった。

Ⅱ　南山短期大学人間関係研究センターの歩み

人間関係研究センターが発足１５年目を迎えた１９９２年（平成４年）３月に発行された人間関係科通信２５号に山口真人氏は「人間関係研究センターの意義」と題する文を寄せている。それは以下のようである。

この春１８期生が卒業する人間関係科は今年で約１８００名の卒業生を送り出すことになりますが、人間関係科が生まれて４年目に活動を開始した人間関係研究センターの受講生も今年で１６００名を越えました。なかなかすごい数字だと思いませんか？　人間関係科のスタッフが普段の大学の授業に加えて授業時間以外の夜間や休暇中の時間を割いて、社会人のための講座にも精一杯のエネルギーを注いできたことの証でもあります。

人間関係科の父ともいうべき大庭征露先生は「人間関係の研究は医学と同じようなもので、医学者が大学での講義以外に必ず付属病院で臨床の場を持つように、人間関係科の教師も学生の授業を以外に、社会人の教育を通して自らの腕を磨き、研究を深める事が必要である」と述べられて、人間関係研究センターの設立に尽力されたことを思い出します。

この様にして生まれ大きく成長してきた現在の人間関係研究センターの働きは、大きく三つに分けられます。第一は研究開発機能、第二は教育研修機能、第三はコミュニティ形成機能と名づけることができるでしょう。

第一の研究開発機能に関して見ると、出版や学会発表や研究会などの形で活発に

行われています。特にＴグループや体験学習の研究に関しては日本での中心的な研究機関の一つとなっています。特に、人間関係科の授業や社会人研修の中で発見した問題やそこで得られたデータを分析考察した成果は、論文という形でセンターの研究紀要「人間関係」や関連学会で発表されています。年一回刊行される紀要は今春９号が出る予定で、これまでに『Ｔグループ』『体験学習』『自己表現』『グループの中に生きる』『対話』『からだ』などの特集を組んでスタッフの研究成果を掲載しています。またスタッフによってトレーニング用に開発された実習やトレーニングツール類は、プレスタイム社から刊行されているＣＯＤ（Ｃｒｅａｔｉｖｅ　Ｏ．Ｄ.）というファシリテーター用のハンドブックに多数収録され、学校や職場などの様々な教育研修の場で活用されています。近々、これまでスタッフがおこなってきたトレーニングのための小講義を集めて単行本として出版することも予定されています。

第二の教育研修機能に関しては、センター主催の社会人講座だけでも今年度は１１講座年間約９０日近くを開催していますが、それらは一般社会人向けの研修から教師やファシリテーターなどの専門家の研究までを含んでおります。例えば今年の場合、『人間関係講座』『Ｔグループ』『ファシリテータートレーニング』『ＴＡ入門』（トランズアクショナル・アナリシス、交流分析）『ＴＡによる自己啓発』『セルフサイエンス』『ボディワーク』『教師のためのセミナー』などです。そのほかにも、スタッフが講師として出かけていく委託研修や講演会、組織体での教育研修のコンサルテーションなどもおこなっています。

第三のコミュニティ形成機能というのは何かと言いますと、例えばその一つは、人間関係科の卒業生が卒業後に再び学びたいと思った時に学びにもどれる場所としてのセンターというようなものです。すでにセンターのどの講座にも卒業生が大抵数名参加するようになってきています。別の例で言うと、人間尊重の立場に立った対人関係や社会関係を産み出そうとする人々の仲間づくりやネットワークの中心としてのセンターというようなものです。この機能はまだ充分機能していませんが、毎年センターのカタログ（講座案内）を作って配布し、人間関係研究センターの存在や精神とその活動を多くの人々に知って活用してもらえるように働きかけています。また、いつでもアクセスできるコミュニケーションチャンネルとしてパソコン通信「南短ネット」もオープンしております。

さて、これからの人間関係研究センターの教育や研究は、狭い意味での人間関係に限定されることなく、より広い意味での人間の人間性や超越性の領域や人間と環境とのかかわりに関する研究およびその教育方法に関する研究にも焦点を広げる必要がありますし、また、それらを支える哲学的原理の確立も課題になるでしょう。応用領域の拡大も考える必要があるでしょう。むろんそれらの成果は実際の教育研修に実現することが期待されます。そしてさらに広く深く人間の尊厳のために人間および人間関係を研究するセンターとして成長していくことを願っています。（文中の「スタッフ」は人間関係科教員の意味、以下の文中でも同じ意味に用いられる。筆者注）

山口氏は人間関係研究センターの三つの機能をあげているが、ここでは、それらの機能を考慮しつつ、センターの歩みを公開講座、研究会、研究紀要「人間関係」の刊行、そして「生涯学習の基盤整備」とのかかわりという４つの側面の概観を通して辿ってみよう。

１．公開講座とカタログの発行

人間関係研究センターの事業の大きな部分をなしているのやはり公開講座であろう。センターの受講生延べ人数は１９９２年には１，６００名になり、１９９７年には延べ３，５７４名となった（〈資料⑦参照〉）。

山口氏は１５年間のセンターの歩みを概観する中で「人間関係科のスタッフが普段の大学の授業に加えて授業時間以外の夜間や休暇中の時間を割いて、社会人のための講座にも精一杯のエネルギーを注いできたことの証でもあります」と述べられているが、講座の実施にはここで、山口氏が“スタッフ”と呼んでいる人間関係科の専任教員の献身的協力が不可欠であった。もちろん、一般社会人向けの講座を担当することはそれ自体、教育実践の貴重な経験の場となるわけではあるが、しかし、他方では週６～８コマの正規の授業負担と授業の事前・事後の打ち合わせにかなりの時間を割かねばならない専任教員にとって、更なる負担となるのも事実であった。センター講座の負担を正規の授業負担コマ数として考えて欲しいという要望が、なかったわけではない。しかし、これまで専任教員が授業負担に加えて、一人当たり１～２の講座を引き受けてきたのは、彼らの熱意以外のなにものでもないであろう。

多くの大学では学年度の後半に入ると、次年度のカリキュラム決定に向けての動きが始まり、教員の次年度担当科目などが１０月にはほぼ決定してくる。人間関係科では、この時期に、平行してセンターの公開講座のプログラム、各講座の担当者が決められた。

センターが開講してきた講座は大きく３つのグループにわけられる。まず、第１回の「旗揚げ興行」以来、「体験学習」方式を学ぶこと、人間関係学習の手がかりをつかむという意味でセンター独自の講座となった人間関係基礎研修講座がある。原則的には実習・ふりかえり・分かち合い・講義からなるこの講座は、受講生が実習でまず何かを体験し、それについて自分自身で検討し、そのあとグループのメンバーで体験や観察したことをわかちあい、そして一般化するというステップをふみながら学ぶ。担当者チームによっていろいろ工夫はされながらも、自己理解、自己の関係性の理解、自己開示、コミュニケーション、フィードバック、自己像の明確化、価値観などを学ぶ機会となった。また、この講座はより進んだ、集中的講座の準備のための学習ともなっている。

また、この講座の中で用いられる実習は、しばしば職場での研修などでも使われているが、初対面の他の受講生と新鮮な感覚で参加できることもこの講座

の持つ魅力の一つであろう。さらに、各講座毎に参加者が異なるため、また参加した個人が自分自身の目標を持って参加することなどにより新たな発見が可能になる学習の場である。１９９７年度中に５０回を数えたこの基礎研修講座への参加者は延べ１，５５８名となっている。

この講座は人間関係研究センターが開発した講座とも言えるが、そのことについてはセンター研究紀要第４号掲載の津村俊充氏によるレポート「人間関係研修センター社会人研修、人間関係基礎研修の理論と実際」、及び同第８号の同タイトルの特集論文を参照されたい。

公開講座の第２のグループに属するものとして、５泊６日の集中体験が中心となるＴグループ（人間関係トレーニング）およびトレーナー・トレーニングがある。１９４５年から１９５０年にかけて主にアメリナのＮＴＬ（National Training　Laboratories）を中心に開発されたこのトレーニングは、ＪＩＣＥが社会人向けに行ってきたが、南山短期大学人間関係研究センターでは、この集中研修を独自の方向性を持って実施してきた。その方向性とはこのＴグループトレーニングを、短大生向けの授業に取り入れ何回か研究的に実践する経験から生まれてきたものである。この講座は各方面から期待されているが、５泊６日の研修に途切れることなく参加することが必要であるため、開催日時の設定を考慮しなければならず、祝日と土曜日・日曜日を活用したり、一般の高中学校が夏休みに入る時期を生かしたりと工夫を重ねている。Ｔグループ・トレーニングに毎年２０名前後の参加者を得てきた。

センター公開講座の第３のグループは各論的なもので、ＴＡ入門（トランザクショナル・アナリシス、交流分析）、ＴＡによる自己啓発、ユング心理学、セルフ・サイエンス、ボディーワーク・セミナー、カウンセリング的対話、クリエイティブアート・セミナー、ホリスティック生命論ワーク、ゲシュタルト・アウェアネス・セミナー、教師のための人間関係講座などが開講されている。また、読書中心のものとしてドストエフスキーを読もう、聖書深読入門などである。

これらの講座への受講者募集のためには、前述したような様々な広報活動を行い、主な新聞への掲載ももちろん行った。そして、１９８８年度より開講講座の紹介以外に写真や読み物のページ、センター事業の紹介、年間研修カレンダーなどを掲載したブックレット風のカタログを毎年発行することにした。１９９６年からは表紙等のデザインをクリエイティブアート・セミナーの担当者、伊東留美氏に依頼し、美しい、独自のカタログとなって発行された。

また上記の３つのもの以外に、この節の冒頭で引用した山口氏の文で述べられているセンターのコミュニティー形成機能に当たるものとして「人間関係科卒業生のための学習会」を１９８１年（昭和５６年）から１９８２年（昭和５７年）にかけて開催した。１９８１年１２月１８日発行の人間関係科通信５号に掲載されたその催しへのお誘いの文は〈資料④〉として文末に掲載した。

この学習会については、人間関係科通信の第６、７、８号の「人間関係科卒業生のフォロー・スルー」として報告されており、１９８１年（昭和５６年）度と１９８３年（昭和５８年）度にそれぞれ６回から１０回かけて実施された。この試みも、好評であったが人関のスタッフが多忙になるにつれてその後、中断し、卒業生は、いろいろなセンターの講座を各自の必要に応じて受講し学習を続けている。近い将来には、卒業生自身の手による研究教育活動が展開されることを希求してやまない。

２．研究会

人間関係研究センターの研究会は年間の忙しいスケジュールの間を縫って、これまでに３５回行われてきた。年間なかなか日程をとることができず、最近の数年は年度も押し詰まった３月、南山短大の卒業式の前日に行われるのが恒例となった。開催された研究会については〈資料⑤〉の一覧を参照されたい。

これらの研究会のテーマや講演をお願いした講師は、人間関係科の科会で示唆された意見にもとづいて企画されてきた。挙げられた研究会をながめてみるとセンター研究員でもある人間関係科のスタッフの関心が体験学習をめぐって、より根源的な人間や宗教の問題、医療と人間、国際協力に向けられていることがわかる。これらの研究会で討論されたことは人間関係科の授業をより深め豊かにする働きをしていることを見逃してはならない。

３．研究紀要「人間関係」の刊行

人間関係研究センターの研究紀要「人間関係」は、センター事業の中で最も研究員が努力を必要とするものであった。これまでに度々述べられたが人間関係科スタッフは授業に、授業準備の打ち合わせに、学生の対応に忙しく、まとまった論文作成に向かう時間は決して多くはない。しかし、一方では自分達の教育実践を記録整理し、関心有る人々に公開して助言や批判を受けたいという期待もある。それやこれやで、とにかく第１７号特集「共にある」を１９９９年（平成１１年）度に刊行したが、この第１７号が南山短期大学人間関係研究センターの発行する最終号となった。（特集とそれに関連して収録された論文のタイトルの概観は〈資料⑥〉を参照）

この紀要の刊行も、いつもスムーズに進められているわけではない。特別研究会の収録は研究紀要の一つの機能であるが、そのほか毎号の特集記事の内容を総合し、人関スタッフが教育実践に研究的にかかわり、それを今後の資料とするためにも丹念に記録されたもので、似たような状況での教育実践の再現時の手がかりともなっている。紀要第１７号の巻末には創刊号から第１７号に至る紀要の総目次及び総索引が収録され、さまざまな研究者の便宜を図っている。

また、この紀要に掲載されたミニレクチャーは別の抜き刷りを作成して、学生の授業用に使用している。

４.「生涯学習の基盤整備」にむけて　委託事業とコンサルテーション

人間関係研究センターが設立されたのは１９７７年で、日本の社会全体を巻き込んだ高度経済成長のうねりもやや落ち着きを見せ、人々の関心は物質的消費から教育・文化といった非物質的領域へと広がっていった。人口の高齢化とも連動しながら人々の学習意欲はまず主婦層へ、そして中高年令者層へと浸透し、正規の学校教育以外の場である図書館、美術館、公民館、社会教育センター、カルチャーセンターで、さまざまな学習活動が繰り広げられるようになった。この流れは日本国内のみならず世界的なうねりとなり、人間疎外から人間中心へと価値観の変換を促すものとしてユネスコ教育開発国際委員会が１９７３年に「Learning To Be」と題する報告書を公刊するきっかけとなった。わが国においても様々な学習活動や大学の社会人に対する門戸開放などの動きが盛んになり、１９８１年には第１２期中央教育審議会が「生涯教育について」の答申を文部省に提出した。この答申がきっかけとなって生涯教育、生涯学習への関心が高まり、都道府県の自治体においても社会教育の関係部署の名称を「生涯教育」や「生涯学習」に改めるようになってきた。

ここで一つ明確にしておかなければならないのは「生涯教育」と「生涯学習」の名称違いである。即ち、前者が知識等を所有することをめざす（Learning to have）の学びであるのに対し、後者は学習過程で「自分は何者であるか」の問に答ながら、自分の在り方を変革し、自分の能力を能動的に発揮し、生きる喜びを確信できるようになることを目的とする（Learning to be）の学びである。そして人間関係研究センターのねらいは、まさにこの（Learning to be）であって、センターの理念や学習方法が社会の多くの人々にとって魅力的な学習の場と捉えられるようになった理由であろう。

人間関係研究センターが受けた委託事業やコンサルテーションはこういった流れの中にあって、人々の要求に応えるものであったと思われる。毎号の紀要「人間関係」にはコンサルテーション及び依頼事業の一覧が掲載されている。きわだったものとしては１９８３年（昭和５９年）に発足した「名古屋いのちの電話」電話相談員養成講座、名古屋市社会福祉協議会主催「なごやかスタッフ養成研修」、名古屋生涯教育センター主催名古屋市民大学「グループリーダーセミナー」などがある。また１９９１年（平成３年）から３年間、名古屋市教育委員会女性の生涯学習推進委員会の委託を受けて「女性カレッジ」（年間全３０時間）を開催した。さらに、１９９４年（平成６年）、（財）私学研修福祉会主催の私立大学職員総合研修のうち「コミュニケーション実習」を研究員が担当した。最近では国際協力事業団依頼の国際的トレーニングも受託した。

また近年各種ボランティア活動に対する関心も高まりつつある中で、「人が人として人と関わること」の意味を問なおすセンターの講座の意味もその重要性を増すこととなった。センター主催の講座への参加者が自主学習グループを作って学習を継続しょうとする動きも多く、そういったグループへのコンサルテーションや援助も重要である。

Ⅲ　今後の課題

決して充分とは言えないが南山短期大学人間関係研究センターの２３年の歩みを概観してみた。発足当時から関わったものにとっては、月日の経つ早さに驚かされながらも、多くの方々のご協力をえて、最初の予想を遥かに超える数々のことが試みられたと実感している。センターはその母体である南山短期大学人間関係科と付かず離れず、人間関係科の存在に助けられながら、時には人間関係科では実施困難な計画を手がけたりしたことが多かった。従って南山短期大学人間関係科が南山大学人文学部心理人間学科となった今、新しい心理人間学科の教育と連携しながら運営されていくだけでなく、広く南山大学全体の教育研究と連携しながら運営されていくことが、おそらくこれからの人間関係研究センターの大きな課題であろう。

南山短期大学人間関係科は創設時から「アクション・リサーチ」を標榜してきた。人間関係研究センターの活動はおそらくこのアクション・リサーチの多くの可能性を示唆し、実践する一つの現場と考えることもできる。そして、これまでの２３年間の実績を、この視点から見直し、その意義を問い直しつつ、次なるステップを模索することがセンターの第２の課題と思われる。

南山短期大学人間関係科は、教員・学生そして卒業生が、社会において「Change Agent」となり得ることを目指して教育を続けてきた。このことは人間関係研究センターについても同様であろう。「どのような？」そして「どのように？」 Change Agent となる可能性があるかを模索することが、おそらくセンターの第３の課題と考えてもよいのではないだろうか。そして、そのことは冒頭で引用された吉川構想の第１の点である教育の人間化と社会の改善・変革へとつながるものであることを確信して止まない。

（この文は筆者が「南山短期大学三十年史」のためにまとめた小論を、訂正加筆したものである。）

資料編

〈資料①〉

南山短期大学人間関係研究センター規程

第１条　本学に南山短期大学人間関係研究センター（The Center for the Study of Human Relations of Nanzan Junior College）（以下「センター」という）をおく。

第２条　センターはキリスト教的人間観に立って広く学際的・行動科学的に人間・人間関係の研究および研修を行うことを目的とする。

第３条　前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

1. 人間・人間関係に関する研究と教育の推進
2. センターと目的を共通する学外研究機関との協力
3. 地域社会における開かれた大学としての諸機能を果たすために研究会・研修会等の開催および個別的相談・指導・援助等
4. 研究成果の刊行ならびに文献・資料の収集と一般への公開
5. その他、センターの目的達成のために必要と認められる事業

第４条　センターに研究員を置き、そのうち１名を主任とする。

②研究員および主任は学長が委嘱する。

第５条　主任はセンターの事業を掌理し、センターを代表する。

第６条　センターは必要に応じて顧問・相談員・講師をおくことができる。

第７条　センターはその目的にそって研修しようとするものを研修生として受け入れ指導・援助を行う。

②研修生についての規程は別に定める。

第８条　センターは事務職員をおく。

②事務職員は主任の指示をうけてセンターの事務を担当する。

付則　本規程は昭和５２年９月３０日より実施する。

〈資料②〉

第１回人間関係講座実施要領

“もっと人間的に成長したい”
“もっと自分を生かしていきたい”
“どうしたら感受性がもっと豊かになるだろうか”
“いつまでも若く、生き生きと生活したい”
“私にはリーダーの可能性があるだろうか”
“もっと人とうまくつき合えないだろうか”

このような望みは変動がはげしく、複雑化する社会においては、ごく当然のことのように思われます。各人の望みや欲求は多角的に満たされているように見受けられながら、実は自己実現からは程遠いのが現状ではないでしょうか。「人間関係入門」講座は生きた体験のなかで学ぶという新しい試み（ラボラトリー方式）を通して自己を理解し、各人の持つ潜在能力を引き出し、より豊かに生きることを可能にするでしょう。入門講座は８回のセッシンから構成され、これを終了した後はさらに進んだ講座へと進むことが可能になります。

《各セッションのねらい》

１．オリエンテーション　　自己像の明確化
２．自分自身を知る
３．どのようにして自己実現ができるかをさぐる　　対人関係の解明
４．私の他人とのかかわり方をふりかえる
５．私の他人とのかかわり方を前向きに検討する　　集団内の人間関係
６．グループの中での自分の動きをたしかめる
７．グループ内での新しいかかわり方を試みる
８．新しい自己実現へ向けて

参加定員　５０名
参加資格　２０才以上の健康な方（男女・学歴は問いません）
期　　日　10月13,20,27日、11月10,17,24日、12月1,8日（木曜日）
時　　間　午後６時～８時30分
場　　所　南山短期大学内南山短期大学人間関係研究センター
（地下鉄いりなか駅より徒歩５分）
申込方法　10月８日までに申込書に登録料を添えて南山短期大学人間関係入門講座係まで郵送して下さい
受講料費　登録料　1,000円　　研修料　8,000円

つづけて積み重ねられる、生きた体験を通しての学習ですから部分的参加、または途中からの参加はできませんので、あらかじめお含みおき下さい。

〈資料③〉

人間関係研究センター年間開講予定プログラムの葉書

【春期入門講座】５月20日～７月８日　毎週土曜日　午後
【秋期入門講座】10月12日～12月７日　毎週木曜日　夕方
※参加定員はどちらも40名、20才以上の健康な方
【人間関係講座Ⅰ】10月７日～11月11日　毎週土曜日
午後１時30分～午後５時
自己理解と自己成長に関するプログラム
【人間関係講座Ⅱ】11月18日～12月16日　時間は上に同じ
集団理解と集団の成長に関するプログラム
※人間関係講座Ⅰ、Ⅱへの参加は原則として入門講座またはそれと同程度の研修をされた方を対象とします。
【ＣＬＬ講座】５月19日～７月７日　毎週金曜日　午後５時～６時30分
英語その他の外国語の集団学習の試み
（Community Language Learning）
【カウンセリング講座】６月10日～７月８日　毎週土曜日
午後５時～６時30分
１～２年カウンセリングに関する基礎訓練を受け、カウンセリング的活動にたずさわっている方を対象とします。

〈資料④〉

「人間関係科卒業生のための学習会」へのお誘い文（人間関係科通信第５号より）

人間関係科がスタートしてからもはや満８年の歳月が過ぎようとし、来年４月には10期生が入学してきます。卒業生の数も約800人、いろいろな分野で、それぞれの個性を生かした活動をなさっていることと思います。人間関係科で学んだことが社会に出てから役に立つのだろうか、という質問をよく受けるのですが、いま、皆さんはどのように思っておられるのでしょうか……。

いま一度、人間関係科にもどってきて仲間と一緒に学習してみる気持ちはありませんか。人間関係科の教員がずっと思ってきたことは、人間関係科で学習したことがほんとうに自分のものとして生きてくるのは、卒業後いろいろな厳しい現実にぶつかった時ではないだろうか、そしてその時に私たちは何かお手伝いできるのではないだろうか、ということでした。

おくればせながら、その機会をいまもとうと考えています。人間関係科を卒業して仲間が集まって、それぞれの体験をわかちあい、援助し合いながらお互いの成長をたすける機会にすることができるのではないかと思います。勿論、私たち教員も参加して、援助しながら共に学習していきたいと思っています。

いまのところ、20人ぐらいで、１ケ月に１回、土曜日の午後３時間ばかりをそれにあててみてはと計画しています。関心のある方は是非参加してください。

〈資料⑤〉

人間関係研究センター研究会一覧

1．1978年11月29日　　コンティンジェンシー理論について
　　— 現状と課題 —　　一橋大学教授　　野中郁次郎

2．1979年４月14日　　大学教育におけるＴグループ適用の試み
　　— 教育の変革を求めて —　　南山短大教授　　星野　欣生・山口　真人

3．1979年10月31日　　これからのカウンセリングのあり方
　　上智大学教授　　小林　純一

4．1979年11月21日　　わたしの歩んできた道
　　上智大学教授　　霜山　徳爾

5．1980年10月15日　　ヒューマニスティック・エデュケーションの動向と
　　自己成長への身体的アプローチ　　南山短大講師　　グラバア藤岡　俊子

6．1981年３月12日　　ブーバーと教育
　　— 我と汝を中心にして —　　金沢大学教授　真行寺　功

7．1981年６月17日　　With-ness ということ
　　— 教師・学生関係について —　　南山短大教授　　星野　欣生

8．1982年３月３日　　関係の神学
　　聖母短大学長　　奥村　一郎

9．1983年３月２日　　教育を考えなおす
　　横浜国立大学教授　　伊東　　博

10．1983年6月11、12日　　からだ・ことば
　　宮城教育大学教授　　竹内　敏晴

11．1983年12月10日　　人間関係の教育
　　京都大学教授　　河合　隼雄

12．1984年１月13日　　もう一つの主婦像
　　— 商店のおかみさんたち　　千葉大助教授　　天野　正子

13．1984年６月13日　　人間関係科における体験学習
　　— 一教員の十二年間 —　　南山短大助教授　グラバア　俊子

14．1984年７月18日　　体験学習と理論学習をめぐって
　　— 背後を読む —　　南山短大講師　　中野　　清

15．1986年５月28日　　人間関係と自己表現
　　南山短大教授　　竹内　敏晴

16．1985年７月20日　　今日からみた人間関係科創設の意義
　　創価大学教授　　澤田　慶輔

17．1985年12月20日　　スペインにおける生命倫理研究の現状
　　南山短大講師　　蛭田　庸代

18．1987年１月23日　　学習者を中心にすえた教育のあり方をめぐって
　　百芳教育研究所　　河津　雄介

19. 1987年１月24日　　豊かさとたくましさ（公開ワークショップ）
百芳教育研究所　　河津　雄介
20. 1987年５月29日　　人間関係科の授業における個と集団の問題をめぐって
南山短大助教授　　山口　真人（話題提供者）
21. 1987年７月21日　　人間関係科の授業における個と集団の問題をめぐって
南山短大講師　　中野　　清（話題提供者）
22. 1987年７月22日　　人間関係科の授業における個と集団の問題をめぐって
南山短大教授　　伊藤　雅子（話題提供者）
23. 1988年３月１日　　水月の極意付リ中墨のこと
玉川大学教授　　上原　輝男
24. 1988年７月19日　　自己との対話　十牛の図
花園大学国際禅学研究所長　　柳田　聖山
25. 1989年１月30日　　体験学習とキリスト教教育
― Ｔグループ・アプローチを中心にして ―
立教大学文学部教授・立教大学キリスト教教育研究所長　　坂口　順治
26. 1990年１月30日　　現代青年考
― 生涯学習の視点から ―　　日本福祉大学教授　那須野　隆一
27. 1991年３月20日　　内側からみる
東京大学教育学部教授　　佐伯　　胖
28. 1992年３月17日　　人間科学の方法論
東京大学先端科学技術研究センター教授　　村上陽一郎
29. 1993年３月17日　　内面世界と自己意識
大阪大学人間学部教授　　梶田　叡一
30. 1994年３月17日　　大学教育のあり方
―「何を」教えるかでなく「どのように」―
南山大学外国語学部助教授　　土田　友章
31. 1995年３月16日　　医療と人間関係
大阪国際女子大学教授　　中川　米造
32. 1996年３月19日　　宗教と人間存在
京都大学名誉教授　　上田　閑照
33. 1997年３月17日　　全てのいのちを育む地球社会を模索して
国際協力コンサルタント　　平山　　恵
34. 1998年３月17日　　出会い・かかわり・学び
― もうひとつの人間関係原論 ―　　南山短大教授　　中野　　清
35. 1999年３月17日　　大学に求められる空間の性格
建築家　　笠嶋　淑恵

〈資料⑥〉

人間関係研究センター研究紀要「人間関係」特集タイトルと関連論文のタイトル一覧

1号．Ｔグループ

2・3合併号．人間教育における体験学習

4号．自己表現　ワークショップ特集

5号．グループの中に生きる（個と集団、チームづくり）

6号．対話（コミュニケーション、対話、聴くこと）

7号．Ｔグループ再考（倫理的側面、トレーナー、対話、学生とＴ）

8号．生涯学習の実践（ボランティア、読書、想起、自己理解）

9号．からだ（祈るからだ、変容、表現するからだ、自己理解の手がかり）

10号．人間教育の核心　－学ぶこと・変わること
（Ｔグループにおける集団と個の変化、性格は変わる？、傍観者から共感者へ）

11号．自己実現（女性の自己実現、ひとり立つこと、組織の自己実現、自己実現のめざすもの）

12号．愛（家族と愛、恋愛と人格、愛の侵略）

13号．いのち（いのちにたどり着くまで、生命の実感と似而非ヒューマニズム、いのちのとき、生命力と創造力）

14号．「人間関係原論」（授業の試みと記録）

15号．「大学における人間性教育の試み」

16号．「体験学習の実際とヴィジョン」

17号．「共にある」

〈資料⑦〉

これまでの人間関係研究センター講座受講者数一覧

人間関係研究センター　受講生数　一覧

講座＼年度	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	合 計
基礎研修講座開講講座数	2	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
人間関係講座	90	45	81	30	51	62	70	90	61	58	39	76	68	96	93	93	123	85	88	105	54	1,558
（継続研修講座・特定講座）																						
人間関係講座　Ⅰ			14	8	16																	38
人間関係講座　Ⅱ		24		8	7																	39
人間関係講座　A						8	20	4		16												48
人間関係講座　B								13	9													22
ＣＬＬ講座	14	2																				16
カウンセリング		15	15																			30
リーダーのためのキリスト教講座					17																	17
自己啓発（浦）											15	18										33
Ｔグループ											20	11	8	6	19	19	23	28	18	24	15	191
トレーナー・トレーニング																17	11	15		10	11	64
ＴＡ入門													20	30	24	31	25	27	講座(2) 43	講座(2) 43	講座(2) 34	277
ＴＡによる自己啓発														13	16	9	8	9	6	6	6	73
セルフサイエンス・セミナー											30	21	17	18	16		30	17			12	161
ゲシュタルトアウェアネス・セミナー													13				14					27
からだとことばのセミナー													30	28	29	31	35	30	28	23	27	261
ボディワーク・セミナー														22	28	27	24	22	16	22		161
ユング心理学																21	10		26	19		76
造形ワークショップ																		16	9			25
クリエイティブアート・セミナー																				24	14	38
日本人の生き方を哲学する																				15		15
キリスト教的人間理解																					10	10
ドストエフスキイを読もう																		25	23	24	15	87
聖書深読入門																			22	14	15	51
教師のためのセミナー								12	5	7	8	4	19	8	10	9	20	11				113
組織内教育セミナー											17	13	15	18								63
アドバンス体験学習															15	16	13		13		23	80
合　　計	104	86	110	46	91	70	90	119	75	81	129	143	190	239	250	273	336	285	292	329	236	3,574